

# 反核医師の会 HANKAKU ISHI no KAI News ニュース

Physicians Against Nuclear War (PANW)  
核戦争に反対する医師の会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-5-5  
新宿農協会館 全国保険医団体連合会内  
電話 03(3375)5121 FAX 03(3375)1885  
e-mail: panw@doc-net.or.jp  
http://no-nukes.doc-net.or.jp/

## 核兵器禁止条約の発効確定 (2021年1月22日)

# 日本政府に条約の署名・批准を求めよう!!



条約採択後よろこび合うサーロー節子氏ら(2017年7月) 日本被団協提供

2020年10月24日、核兵器禁止条約はホンジュラスが批准したことで批准国が50カ国に達し、2021年1月22日に発効することが確定した。反核医師の会は、これを歓迎し、戦争による唯一の核兵器被爆国でありながら、日本政府が核兵器禁止条約に背を向けていることは許すわけにはいかないと、声明を発表した。内容は、以下の通り。

条約は、①核兵器は「非人道兵器」と認定し、②核兵器の開発、保有、使用、使用の威嚇などあらゆる活動を禁止し、③被爆者核実験被害者の「苦難」と「努力」に言及し、④核兵器の被害者の権利を明記している。さらに、⑤保有国の核兵器廃棄への道筋を描き、⑥核兵器に「悪の烙印」を押すことで、核抑止に依存することの正当性を崩し、核兵器国と「核の傘」依存国への圧力になることが謳われている。

核兵器使用の可能性は、意図的な使用に限らず、事故、あるいは誤算による使用も十分にありうる。核兵器の脅威は、その廃絶まで続く、長く険しい道のりであるが、核兵器禁止を願う世界中の人々の努力がいっそう必要になっている。

「核兵器禁止条約」発効は、意図的な使用に限らず、事故、あるいは誤算による使用も十分にありうる。核兵器の脅威は、その廃絶まで続く、長く険しい道のりであるが、核兵器禁止を願う世界中の人々の努力がいっそう必要になっている。

### 「唯一の戦争被爆国 日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」に取り組もう

核兵器禁止条約発効の確定を受けて、日本原水協から「唯一の戦争被爆国 日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」が提起され、共同呼びかけ人による呼びかけでスタートした。12月12日現在、反核医師の会代表世話人3名も含め、137人が共同呼びかけ人になっている。

署名の訴えは次の通り。

「いま世界では、核兵器禁止条約の発効から核兵器廃絶へとすすもう、という声があがっています。多くの国々が被爆者の声にこたえ、核兵器禁止条約を支持し、参加しつづけています。多くの国々には、被爆者の声に耳を傾け、核兵器による安全ではなく、唯一の戦争被爆国である日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」

唯一の戦争被爆国である日本政府は、核兵器廃絶の先頭に立たなければなりません。国内の世論調査でも、日本が核兵器禁止条約に署名・批准することを求めています。

署名用紙は、反核医師の会のホームページからもダウンロードできるので、ご活用いただけます。

内閣総理大臣 殿

唯一の戦争被爆国  
日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名

いま世界では、核兵器禁止条約の発効から核兵器廃絶へとすすもう、という声があがっています。多くの国々が被爆者の声にこたえ、核兵器禁止条約を支持し、参加しつづけています。多くの国々には、被爆者の声に耳を傾け、核兵器による安全ではなく、唯一の戦争被爆国である日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」

私は、日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求めます。

名前	住所

この署名は、2021年10月29日、被爆者をはじめ各界・各層の代表135名以上が呼びかけによりスタートしました。日本政府に署名し、ご記入いただいた個人情報は、この署名活動には使用しません。

【取扱い団体】

連絡先: 署名事務局 (原水協連日本協議会)  
〒151-0054 東京都渋谷区代々木2-4-4  
電話: 03-3342-0031

### 声明

#### 核兵器禁止条約の批准国が50カ国を超えたことを大歓迎する

2020年10月25日  
核戦争に反対する医師の会(反核医師の会)

本日、核兵器禁止条約を批准した国が50カ国を超えた。90日後には、この条約が国際条約として発効する。私たち反核医師の会は、被爆から75年のこの年に、核兵器禁止条約の発効が確定したことを大歓迎し、核兵器の廃絶を願う被爆者、非核兵器国、並びに市民団体などの多くの仲間たちと共に喜びたい。

ヒロシマ、ナガサキに原爆が投下され、その年の12月までに21万を超える命が奪われ、生き残った被爆者に今なお続く多大な苦しみを強いてきた核兵器を、この地球から廃絶することは、被爆者はもちろん全人類の願いである。しかしながら、今なお1万3千を超える核兵器が存在し、核兵器国はNPTで認められた5カ国に加え、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮と増えており、核戦争による人類の滅亡の危険がかつてなく高まっている。

被爆者を中心として、核兵器の非人道性を世界に訴える運動が広がる中で、核兵器の開発、実験、製造、備蓄、移譲、使用及び威嚇を禁止するという核兵器禁止条約が国連で採択された2017年7月7日、我々は人類の未来に大きな希望を持つことができた。

核兵器禁止条約が発効しても、核兵器がなくなるわけではない。圧倒的多数の国連加盟国がこの条約を批准し、核兵器に悪の烙印を押し、核兵器国ならびに核の傘の下にある国々に、核兵器による安全保障ではなく、信頼と友好による安全保障を求めなければならない。

その中で、戦争による唯一の核兵器被爆国でありながら、わが日本政府が「核兵器廃絶は究極の目的」として、核兵器禁止条約に背を向けていることを許すわけにはいかない。「後世の人びとが生き地獄を体験しないように、生きていくうちに何としても核兵器のない世界を実現したい」という被爆者の願いに寄り添い、核兵器禁止条約を批准し、核兵器廃絶の先頭にたつことを強く求める。

### ガンマ線

こまつ座の演劇、父と暮らせば、(井上ひさし)が好きた。原爆投下から3年後の広島。主人公は、生き残ったことよしましさを感し、幸せになつてはいけな心と心を閉ざして生きる一人の女性だ。彼女とその父の二人芝居という狭く小さな切り口だが、二人の対話からは無数の被爆者の人生が滲み出るように伝わってくる。高校生だった私には、「生きていく」ことを苦しみ恥じる、その主人公の葛藤がとても印象的だった。

「核兵器」というものは、どこまでも人間を付け回し、なんどもなんども人間を騙し討ちにして、人間の生きる勇気と誇りを台無しにする悪魔の贈物」。井上ひさしの言葉だ。父と暮らせばは、原爆に苦しめられながら、それでも生きていく人たちのための作品だと思った。苦しみがからも前を向き生きる意味を見つけていく主人公の姿が、命を削って被爆者体験を伝えてくれる被爆者の方々の姿に重なる。その姿から、当事者は核の時代を生きる私たち全員だと気づかされる。被爆者の声が核兵器禁止条約となり、核兵器を「なくせるかどうか」ではなく「なくす」ことが前提になった。今、私たちがどう生きるのか、問われていると思う。(A・M)

# 反核医師の会・つどい実行委員会

## 11・1オンライン講演会開く



中村桂子氏

を中心にして、講師は長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECENA）准教授の中村桂子氏がつとめた。

折しも核兵器の開発や製造、保有、使用などを全面的に禁止する核兵器禁止条約の批准国のホンジュラス国連本部での批准の連続終了により条約発効に必要な50に達し、90日後の2021年1月22日に発効することになった。これにより核兵器を人道的に違法だとする初めての国際条約が動き出すことになる。その直後のオンライン講演会となり、zoom使用

新型コロナウイルス感染拡大にともない本年予定されていた第31回反核医師のつどいinちばが一年先に延期となったため、実行委員会、反核医師の会代表世話人会で、他の企画を計画した。その結果、11月1日オンライン講演会開催の運びとなり、全国より約140名が参加した。

講演のテーマは「被爆75年・核兵器をめぐる国際情勢―核兵器禁止条約

による午後5時から7時まで約2時間の質疑応答を含めた講演会となった。

反核医師の会ちば代表世話人でつどい実行委員長である川村実先生による挨拶の後、中村桂子氏より「核兵器をめくって世界はどのような状況にあるのか？」、「核兵器禁止条約の発効、その意味は？」、「三、日本、私たちの課題は？」、この3点を中心に講演された。特に核兵器禁止条約の内容に多くの時間を割かれた。唯一の戦争被爆国の閉会の辞にて無事初のオンライン講演会は終了した。

延期となった「反核医師のつどい」は2021年10月30日・10月31日、千葉・幕張での開催予定。

（反核医師のつどいinちば実行委員 前島明）



オンライン講演会の模様

## 11・1 オンライン講演会 主催者アピール

2017年7月7日、国連で採択された「核兵器禁止条約」は、10月24日、ホンジュラスの批准により発効に必要な50か国に達し、90日後の来年1月22日に発効することが確定しました。国連のグテーレス事務総長は、「核兵器使用による壊滅的な人道的結末に目を向けさせた世界の運動が成就した」と評価し、核廃絶が「国連にとって軍縮問題の最優先事項」と改めて強調した、と伝えられています。この講演会を企画した反核医師・医学者のつどいinちば実行委員会は、この条約が発効となることを心から歓迎し、長年にわたり条約の採択と発効のために奮闘されてきた被爆者、そして核兵器廃絶と平和のために取り組まれてきた世界中の人々に改めて敬意を表したいと思います。

しかし、日本政府は、同条約採択時には棄権、その後もかたくなに条約への参加を拒否し続けています。こうした日本政府の態度は被爆者の願い、全世界の核兵器廃絶と平和を願う人々の思いに背を向けた態度と言わざるを得ません。また、いわゆる「黒い雨」裁判で、原告の被爆者84人に対し、広島地裁は原告の訴えを認め、被爆者健康手帳の交付を命じる判決が下されました。被爆者の身体的、社会的な苦痛と苦悩に対し、一つの明かりをもたらすものでしたが、被告である広島市と県は、国の要請を受け8月12日に控訴しました。これまでの最高裁判決と異なることや、十分な科学的知見に基づいたとは言えないことなどから控訴した、とされています。この判決に対する態度一つとっても、被爆者の思いとは裏腹な態度表明として、大変残念でなりません。

今年は戦後75年という節目の年です。新型コロナウイルス感染症の世界的な拡がりの中、核兵器廃絶の運動や諸会議も制限や延期、中止をせざるを得ませんでした。そのような中であって、今回の核兵器禁止条約の発効は、核兵器廃絶への道筋を明確に指し示していくことになると思います。私たちは、全世界の核兵器廃絶を願う人々とともに、一刻も早い廃絶実現を希求し、その実現のために奮闘する決意です。

2020年11月1日 反核医師・医学者のつどいinちば実行委員会一同

同条約は、核なき世界が「国家および集団的な安全保障の利益にかなう最高次元での地球規模の公共の利益」とあり、「核兵器の使用による犠牲者（ヒバクシャ）ならびに核兵器の実験による被害者にもたらされた受け入れがたい苦痛と被害」にも触れる内容になっています。その上で、開発、実験、製造、備蓄、移譲、使用、そして威嚇をも禁止し、全世界の核兵器廃絶を願う人々の思いを結実させたものです。この条約の締結を求め全世界で取り組まれている「核兵器廃絶国際署名（ヒバクシャ署名）」は国内だけで1200万筆を超え、日本政府に同条約への参加を求める地方議会の意見書は494、全自治体の27%に上っています。

### 三団体で外務省要請を実施

2020年12月4日、保団連非核平和部、反核医師の会、近畿反核医師懇談会の三団体で、6回目の外務省要請を行った。

中川武夫、原和人、飯田哲夫各代表世話

人、松井和夫保団連非核平和部員等7人が参加した。外務省からは軍縮核不拡散・科学部軍縮課から2名が対応した。

要請内容は、①核兵器禁止条約に日本政府として、署名し、批准すること。②第75回国連総会で、非核兵器国が提出する核のない世界に向けた決議、核兵器禁止条約に関する決議に賛成すること、少なくとも反対しないこと。また国連総会において、核兵器廃絶に向けて日本政府が積極的役割を果たすこと、③NPT条約に違反する行為を続ける



要請書を手渡す 飯田代表世話人

### 追悼・苜昭三先生



尊敬してやまない苜（あざみ）昭三先生のご逝去の報を受け、心の中に涙があふれ出た。

「反核医師の会」で20年間共に活動させていた

だいた中で、苜先生から数知れぬ教訓を得た。国内外情勢・IPPNW運動の歴史の推移の分析・諸外国の運動から何を学

ぶか・被団協、原水協、非核の政府の会等々の方針を緻密に分析され、「反核医師の会」の運動に、最大限生かすべきかを常に考えられ、果敢に実践された。

1987年2月にニュージーランドで開催された第1回IPPNWアジア・太平洋地域シンポジウムに36人の医師の参加を組織した。民医連・保団連の「反核運動」の理念を世界に訴え、同時に世界の医師の運動を学

### 苜（あざみ）昭三先生の略歴

- 1927 石川県に生まれる
- 1945 海軍兵学校在学中に終戦
- 1952 金沢大学医学部卒業（内灘基地 接收反対闘争）
- 1953 内灘診療所所長
- 1969 全国スモンの会結成「SMON病の6例」「慢性疾患の管理によせて」
- 1974 「民医連と青年医師の『研修』」
- 1976 「スモン闘争の現状と任務」
- 1978 全日本民医連副会長
- 1982 全日本民医連会長（～92年）
- 1987 「薬害エイズにおける医師・医学者の責任」「核凍結から核廃絶への歴史的転換―IPPNWの軌跡」
- 1992 全日本民医連名誉会長（～現在）
- 2000 『戦争と医療』
- 2020.7.19 逝去 享年93歳

ぶこと、特に核兵器廃絶は人類の緊急な課題を基軸に据えていく活動を旺盛に展開する事などを基に位置付けた。集会決議文に「核兵器廃絶は緊急の課題」という文言を入れるように全体集会で提起し、会場の万雷の拍手で採択された。

チェルノブイリ原発事故の大会の決議文に「核兵器廃絶を主張する意見に同意する」と述べられた

時、私達は拍手し続けた。先生の抑制された笑顔が、脳裡に残っている。

この地域シンポジウム・世界大会の成果に確信を持ち、大会に参加された医師も中核になり、1987年8月1〜2日、294人の参加、943万円のカンパを得て第1回「核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者の集い」の設立総会が成功裡に行われた。

苜先生は、スウェーデンの大学教育での「反核教育」の実践をヒントに、2003年に「核のない世界へ―医療人のための平和テキスト」の出版に

も尽力された。原則を堅持し、世界の医師の活動から学ぶ姿勢は、一貫していた。

先生の「核兵器廃絶」の意志は、PANWに継承され、発展し、国連での核兵器禁止条約批准国が、間もなく発効される。「反核医師の会」を結成し、育んでいただき感謝いたします。安らかに眠りになれないかもしれませんが、時々揺り動かさせていたたく事をお許しください。（2020年9月記）

（顧問 児嶋 徹）

# 「黒い雨」被爆者訴訟全面勝訴するも

## 県・市が控訴後、広島高裁で第1回口頭弁論

2020年7月29日、「黒い雨」被爆者訴訟は、広島地裁で、原告84人全員を被爆者と認定する判決が言い渡された。しかし、8月12日、国の強い意向で県・市が控訴し、反核医師の会は、控訴断念を求める声明に続いて控訴への抗議声明を発表したことまでを前号に掲載した。

今号では、その地裁判決の詳細と、その後、11月16日開催された国の検討会や広島高裁での11月18日での第1回口頭弁論について報告する。

### 「黒い雨」被爆者訴訟全面勝訴するも県・市が控訴

長崎の被爆地域は市の行政区域にそって南方のみ爆心13kmと長い。1974年、76年に被爆者認定につながる「健康診断特別地域」が爆心約6

kmの北、東、西方向に新設された。これにあわせて広島では被爆直後に気象台が調べた降雨地域のうち19x11kmの「大雨地域」が健康診断特別地域に指定された

黒い雨は「大雨地域」よりも広範囲に降って健康被害を生じており、住民たちは地域拡大を求めてきた。気象学者の増田善信さんは詳細な調査をして1988年に降雨域は気象台調査の「小雨地域29x15km」の4倍になると発表した。

「黒い雨には放射性微粒子が含まれており、健康障害生じる可能性があるから3号被爆者の認定根拠としてきた。原告84人はいずれも黒い雨に暴露して健康管理手当の対象となる疾患に罹患しており、3号被爆者に該当する」として被爆者健康手帳の交付を命じる判決を出した。

広島県・市は控訴断念の姿勢を示したが、国は判決は科学的知見に基づいていないこと、長崎での被爆体験者訴訟では最高裁で原告が敗訴していることから控訴を望んだ。国が特別地域の再検討の方針を示したため県・市は控訴して高裁でのたたかいが始まった。

### 国の検討会

開催

11月16日厚生省で第1種健康診断特定地域に関する検討会が開催された。黒い雨には放射性物質が含まれていたのか、健康被害はあったかについて、過去の調査の検証

### 広島高裁で11月18日に第1回口頭弁論

原告団長の高野正明さんは「全員勝訴判決に多くの人が共感と喜びの声を寄せられました。国の不当な控訴に対して全国から抗議と撤回を求

と実地調査、原爆病院の5万人の被爆者カルテの検証などをおこなう。構成員には被爆者の木戸さん、気象学者の増田さん、広島原研元所長の鎌田七男先生も入っており、被爆者の立場に立った検討がなされることを期待したい。

ている事案であるとして、「高度の蓋然性」に固執する被告に控訴理由について釈明を求め、次回2月17日に結審する可能性に言及した。

長崎の被爆体験者訴訟は28人が再提訴をしており、最近の調査で被爆区域外の土壌からもプルトニウムが検出されていることが明らかとなった。

長崎の被爆体験者訴訟、福島原発訴訟と連帯して核被害を糾弾し、高齢の原告に早期に勝訴判決ができるよう支援をしていこう。(常任世話人 青木克明)



広島地裁にて



全面勝訴で喜ぶ被爆者たち原告

### 会費納入のおねがい

反核医師の会は、会員のみなさまの会費と、主旨に賛同いただいている募金によって運営しています。会費納入のほど、よろしくお願いいたします。

2020年度(2020年4月1日~2021年3月31日)

個人会員(医師・歯科医師、医学者) 10,000円  
 研修医(卒後2年まで) 3,000円  
 医・歯学生会員 1,000円  
 賛助会員 1,000円

#### 振込先

- ◇りそな銀行 新都心営業部  
普通 1557502  
「反核医師・医学者の集い」
- ◇ゆうちょ銀行(他銀行からの振り込みの場合)  
〇一九支店  
当座 0056764  
「反核医師・医学者の集い」
- ◇郵便振替 00170-7-56764  
「反核医師・医学者の集い」

### ヒバクシャ国際署名は2020年12月末日を持って終了

2016年から続けてきたヒバクシャ国際署名は、2020年10月28日のヒバクシャ国際署名連絡会議によると、9月までに署名は、全体で、12,612,798人分集まっている(昨年から2,094,926人分の増)。コロナ禍のため、オンラインを通じて国連に報告され、中満泉国連事務次長(軍縮担当上級代表)より、感謝のメールが届いている。またこの署名は、昨年12月末で終了とし、最終集約を行なった。最終的な署名数が分かれば、お知らせする。

### お知らせ



今年の「第31回反核医師のつどい in 千葉」は、2021年10月30日(土)・31日(日)に千葉・幕張で開催予定。

# 原水爆禁止世界大会2020 国際会議を視聴して



世界的なコロナウイルス感染拡大により、オンラインで開催された8月2日の原水爆禁止世界大会 国際会議を視聴した塩川常任世話人より概要と感想を報告する。

原爆被爆から75年という節目の年、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、今年の原水爆禁止世界大会はすべてオンライン開催となった。私は8月2日に行われた国際会議にZoomで参加した。当日の参加者は600人とのことだったが、リモートなので、一体感には欠けるうらみ

が合った。冒頭、カナダ在住の被爆者、サー・ジョージ・ハドソン(88)のしつかりした訴えのなかで印象的だったのは次のくだりである。「2017年7月7日、国連で核兵器禁止条約が採択された瞬間、周囲の人々は総立ちして歓声を上げ、拍手や抱擁しあっていた。私はずっと涙を流して待っていました。溢れる涙を拭きながら顔を閉じ祈った瞬間だった」

第1セッション(世界の平和運動)では、米国、英国、ロシア、ドイツ(国際平和ビュロー)、日本の代表が発言し、とりわけ、英国のCND(核軍縮運動)のケイト・ハドソン事務局長が、運動にとって不可欠な3つの要素として「団結、多様性、国際協力」をあげていたのが心に残った。

第2セッション(アジア・太平洋)では韓国、ベトナム、インド、日本の代表が報告、このなかでは韓国のイ・ジュンキユ氏(韓神大学統一平和政策研究院)による朝鮮半島問題の分析と東アジアの平和構築に向けた発言を興味深く聞いた。やや混迷を深める北東アジアの政治情勢だが、韓国民衆との連帯が重要だと改めて感じた。

最後に「主催者声明」が読み上げられたが、その一節を紹介する。「いまなお1万4千発近く核弾頭が存在し、2千発近くの核ミサイルが直ちに発射できる状態にあります。意図的な使用の危険に加え、偶然や誤算によってさえ、核爆発が起きかねない状況が続いています。幸運にも、最悪の事態を回避してききましたが、核兵器が存在する限りその危険は続きます。人類の生存をこれ以上『運』にゆだねるわけにはいきません。(中略)核兵器廃絶の緊急性はいつそう明らかとなっております。これを求める世界的流れはさらに前進を続けています」

来年の原水爆禁止世界大会がどのような形で開かれるか未知数だが、発効した核兵器禁止条約のもとでの初めての世界大会となるわけで、核兵器廃絶をめざす運動にとって画期的なものになることを願うものである。(常任世話人 塩川哲男)

## 書籍紹介

### 「語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心(上)」

ウインかもがわ 京都「被爆2世・3世の会」(編)

(2020年7月発行 定価2000円+税)



ISBN : 978-4-909880-16-0

取材順に前半の50名(現在も増加中の証言者を含め後半は下巻に収録・発行予定)の証言集である。この証言集取材は、その被爆体験を8月6日と8月9日当日に限らず、生き延びることが出来たその後の人生すべてを被爆体験としてとらえている。そこから見える被爆の実相が、いのち、からだ、くらし、さらにはひととのつながりにまで及ぶことが明らかになり、さらにそれに立ち向かって生き続けてきた実相も明らかにする。世界の潮流は核抑止・安全保障論から核の非人道性へと大きく変わり、幾多の曲節があつても、そのうねりは続くであろう。そしてその原典に被爆者の発言・行動があることを忘れてはならない。(代表世話人 飯田哲夫)

この書籍は、京都「被爆2世・3世の会」の遺傳的影響の実態と真実を追究し、被爆2世・3世の健康問題の解決と、あらゆる核被害者の救済に役立てる。この2つを目的に、東京電力福島第一

原発事故の翌2012年から活動している団体(代表世話人・平信行 Htp://aogiri.23.jp)が、ヒロシマ35人・ナガサキ15人の被爆体験の実相と現在をまとめた証言集である。

## 訃報 反核医師の会常任世話人 深澤尚伊先生のご逝去



2020年9月5日、反核医師の会常任世話人 深澤尚伊先生が、ご逝去されました。享年69歳。

先生は、1952年生まれ、1978年群馬大学卒業、前橋協立病院入職、1991年8月、協会の副会長に就任され、多岐にわたる活動が期待される中でのことであり、無念です。

興味的水彩画はプロフィール

世話人だった深澤尚伊(ふかさわ なおい)先生が、ご逝去されました。享年69歳。その間、2012年8月、協会役員として環境平和部長担当、2013年8月、協会副会長に就任され、多方面にご活躍されていきました。反核医師の会についても、常任世話人を長く勤められたことが、会に大きな貢献をされました。2019年10月20日には、新しく群馬反核医療者の会を立ちあげ、今後の活動が期待される中でのことであり、無念です。

(編集担当事務局)

## 〈写真の説明〉 当日の報告者一部(Youtubeより)。上段右から二人目がサー・ジョージ・ハドソンさん、中段左端がイ・ジュンキユさん